

宰府画報

第 9 号

2021 年 11 月
(令和 3 年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課



バックナンバーはこちらから

調査見聞

『筑前名所図会』の挿絵の筆者

福岡を代表する地誌のひとつ

『筑前名所図会』(以下、『図会』)は、『筑前国統風土記』『筑前国統風土記附録』などと

並ぶ、福岡を代表する地誌のひとつです。企画と編集をしたのは、博多の商家に生まれ、太宰府にも暮らした、文化人の奥村玉蘭です。この『図会』は、筑前各地の歴史や風土、風俗に関する事柄が、豊富な数の挿絵によって、視覚的に理解しやすいという点に大きな特徴があります。序文に文政4年(1821)の年紀があり、この頃完成したようですが、



『筑前名所図会』巻4 安楽寺鬼すべ図 福岡市博物館蔵

出版には至らず、現在原本として扱われている福岡市博物館所蔵の10巻本は未完成の稿本です。

挿絵の筆者

『図会』の挿絵の数は約250図ありますが、これまでは、一部の図を除いて、文字も挿絵もすべて玉蘭が書いたものだと思われてきました。『図会』の凡例に、「余自是を『画』き、「友人の補画ハ、其名を記す」とあるためです。確かに12図に9名の人物の署名があるのみなので、それ以外の全てを玉蘭が描いたように思われます。ところが挿絵全体を見渡すと、玉蘭独りが描いたとは考えがたい、複数の作風があることに気づきます。ここで再び凡例を見ると続きがあつて、「人物の画ハ諸家に畫」めたと、先の補画とは別に、人物を描く図もまた複数の絵師に依頼したと読み取れる記述がありました。

齋藤家資料からの大発見

さて、齋藤家資料報告書の刊行からまもなく2018年のとある日、当時文化財課で調査チームをとりまとめた宮崎亮一氏から、『図会』の挿絵と雰囲気似た絵が資料中にあるとの指摘を受けました。どきどきしながら見てみると、下図の通り互によく似た図

柄のものがありました。まさに人物を描く図です。秋圃は『図会』の挿絵の筆者の一人ではないかと思ひ、資料を再び探してみると、スケッチなどをしたためた帳面の用紙の一部に『図会』と同じ書体の「筑前名所図繪」の文字が摺られた反故紙(不要紙)を確認することができました。残念ながら『図会』の下描きはありませんでしたが、これらの資料の発見は、秋圃が『図会』の制作に関わっていたことを強く窺わせるものです。

玉蘭の発願で建立された太宰府天満宮絵馬堂には秋圃の絵馬が掲げられ、両者は知己であつた可能性もあります。玉蘭が人物図を得意とする当代きつての絵師たる秋圃に作画を依頼したことは十分に考えられます。(井形栄子)



図右から

『筑前名所図会』巻6 刈田図(部分)と《綾部八幡宮社参図》(部分)

『筑前名所図会』の柱題と《写生帖》の柱題

※柱題…袋綴じ本の折り目部分に摺られる題目のこと

メイショ

【染川】

光明寺の北側を東西に流れる染川は藍染川とも呼ばれる、古来より知られる恋物語スポットです。話のあらすじは、「昔、天満宮の神官である中務頼澄が、京で梅壺という女性と恋仲になり梅千世という男子をもうけますが、頼澄は筑紫に帰り母子とは離れることに。歳月を経て梅壺は成長した我が子を父に逢わせようと、太宰府まで下り頼澄へ手紙を宛てます。手紙を見た頼澄の妻は偽りの返事を書き梅壺母子を追い返そうとし、梅壺は悲嘆のあまり藍染川に身を投げてしまいます。残された梅千代が泣いているところへ、偶然通りかかった頼澄は、梅壺の遺書によつて事情を知り、梅壺の蘇生を天満天神に祈ります。すると不思議なことに、天神様が現れ梅壺は生き返つた。」というものです。

この物語は謡曲「藍染川」として知られ、「染川」という語は和歌の歌枕にも多く用いられました。明治期に太宰府の名所を描いた吉嗣拜山の『太宰府廿四詠』にも紹介されています。今は水量の僅かな小さな川ですが、「梅壺侍従蘇生の碑」が残され、かつての恋愛悲話を偲ばせる場となっています。(木村純也)



「梅壺侍従蘇生の碑」と染川

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

齋藤秋圃作

【葵氏艶譜】

葵氏が描いた遊郭の絵本

筑前の絵師あるいは太宰府の絵師として知られる齋藤秋圃は、もとは上方の人でした。前半生は不明な部分が多いものの、京の公家の家柄に生まれ、30歳前後で大坂に移り住み、遊郭の新町で幫間(宴席で座興をする男芸人)として暮らしていました。なかなか珍しい経歴です。当時の秋圃は葵衛と名のり、亦助、双鳩子なども号していました。本作品はこの頃に制作されたもので、著名な俳人や遊女などの俳句とともに、色彩豊かな秋圃の挿絵が展開してゆく冊子本です。

情事より常時を描く

艶譜というと、浮世絵の春画のように男女のなまめかしい様子を描いたもののように思われますが、本作品はそうではありません。



全3冊 紙本木版色刷 ※図は福岡市博物館所蔵資料

たとえば、左上の図は舞いの伴奏者である地方の女性が三味線などを弾く様子を、下の図は遊郭近くの蕎麦屋の賑わいを描いています。遊郭の主役だけでなく、裏方など様々な人々の日常や、来訪する客の気取らない姿などが、新町を隅々まで知っていたであろう秋圃の鋭い観察眼で描き出されています。

出世作にして代表作

にこやかな笑顔と丸みのある体型、見る者をくすりと笑わせるユーモラスな仕草など、秋圃の人物表現にはなごやかな雰囲気があります。しかしたとえば上の図を見ると、右上に余白をとり、反対に左下にはモチーフを凝縮させて構図にメリハリを付けたり、蠟燭と炎は細く鋭い線で描かれていて、画面をきりりと引き締めています。緩急のある構図や描写がある種の心地よさを生み出す点が秋圃作品の特徴と魅力だといえます。

彫りと摺りの技巧も優れた『葵氏艶譜』は人気を博して版を重ね、秋圃の名も一躍有名となりました。秋圃の出世作であり、その完成度の高さから、代表作の筆頭にも掲げられる名品です。

秋圃が上方を去って九州に來たり、筑前秋月藩の御抱え絵師となるのは、初版刊行から2年後のことです。(井形栄子)



紙本墨画淡彩 38.5 × 27.0cm

いちまい 賞鑑稿画

【鹿図】

齋藤家資料 鹿の絵の名手と謳われた齋藤秋圃にかかわる齋藤家資料のなかに、「鹿

図」があることは不思議ではありません。今回紹介するのはそうした画稿のなかの一点で、淡い色彩が施された本画の下絵ともいえるべき作品です。ここでは二頭の雌雄と思われる鹿が水辺に遊び、両岸には薄も描かれ秋の様相を示しています。紙継ぎも知れ、画面の上下には破損もみられますが、資料のなかに大切に保存されていました。

この画稿の裏面には「廿二番草光」の墨書をみるることができます。齋藤家のなかで草光を名乗るのは秋圃の長子璘太郎で、文政11年(1828)に家督を継ぎますが、それから10年後、江戸において出奔し秋月藩齋藤家が断絶することになります。その草光の画稿がきちんとこのように残っているところに、秋圃の後を受けて画系を繋いだ梅圃の意志をみることも可能だと思えます。齋藤家資料には10点余の「草光」の墨書をみるることができます。(橋富博喜)

ひとこと くずし字

【カ】

これ、読めますか？

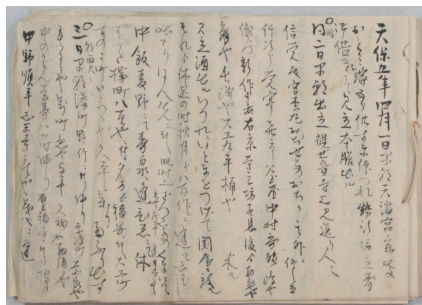


昔の書状を読んでいると「カ」という、漢字のようなひらがなのような、一見何と読むか分からない

音につき一字とすることが決まり、徐々に使用されなくなりました。「カ」の他にも「コ」「メ(シテ)」など多岐にわたる合字が使用されてきました。手書きが主流の時代はこうした省略文字が重宝されたことでしょう。

合字は複数の漢字や仮名などで表記する語を一字で表す文字ですが、明治33年

合字はPCやスマートフォンで打つことが可能です。お手元の機器で探してみてください。(木村純也)



齋藤家資料「京遊日記」より